

「え～ん。Bちゃんのジュースのほうがボクよりおいよー。」Aくんが泣いています。お母さんは、AくんにもBちゃんにも同じ量だけジュースを注いでいました。Aくんは、なぜBちゃんの方が多と思ったのでしょうか。よく見てみると、AくんとBちゃんのコップの大きさが違います。Aくんのコップは底面積が広く、高さの低いコップ。Bちゃんのコップは底面積が狭く、背の高いコップでした。Aくんは、コップの高さだけを見て、「Bちゃんのほうがおい」と言ったのです。

どっちが多い？

～子どもの見ている世界～

このように、子どもの目に飛び込んでくる（＝目立つところに意識が集中する）ことを、「中心化（centration）」といいます。これは、発達心理学の父と呼ばれているピアジェ（J.Piaget）が唱えた有名な理論「自己中心性（egocentrism）」の中の、代表的な概念の一つです。ここでいうところの「自己中心性」とは、自分勝手に意味する「ジコチュー」とは異なり、自分が見えている視点から世界を見ることを言います。子どもは、相手の立場でものごとを想像することが難しいので、自分が楽しいことは相手も楽しいに違いない！と思っているのです。

さて、このような子どもの「自己中心性」を活かして、病院ではどのような工夫がなされているのでしょうか。お薬が苦手なCちゃんは、目の前に置かれた錠剤を前にして「こんなにおおきなつぶ（錠）のおくすり、のめないもん！」と嫌がっています。子どもに携わる看護師は、このような場面によく遭遇します。

この場合、看護師は医師に確認し、許可が得られたら、薬剤師にお願いして錠剤を砕いてもらいます。そしてCちゃんには、砕かれて小さくなった錠剤を渡し「ちっちなつぶなら飲めるかな？」と促します。そうすると、Cちゃんは「うん！」と言って、頑張りとお薬を飲むことができるのです。

このように、子どもは発達に応じて様々な世界を拓き、日々成長しています。看護師は、子どもの見ている世界を理解しながら、成長発達に合わせた看護ケアをしていく必要があるのです。